

リチャード・W・ロウキマ著／勝田吉彰・吉田美樹著
『すぐ引ける、すぐわかる精神医学最新ガイド』

(星和書店・二〇〇八年二月)

勝田吉彰著

『ドクトル外交官世界を診る』

(星和書店・二〇〇八年七月)

勝田 吉彰



前者は精神医学の一般向け普及書の翻訳である。原著者はニュージーランドの精神科医、ロウキマ教授。ロウキマ医師の臨床経験・社会経験をあげて患者家族のために送り出されたものである。統合失調症・気分障害はいうにおよばず、摂食障害・認知症・人格障害など幅広く網羅、原著者自身が身内に患者を抱えるアルコール依存症のくだりはその経験が詳細に語られ思いが行間から伝わってくる。

トラウマ関係では一七二頁からPTSDの一般的解説、また、五二四頁からEMDRについても触れられている。

いずれも具体的な病気の説明のみならず、ストレスおよびその対処やライフスタイル、遺伝といった精神保健的側面の紹介にもスペースが割かれ、より健康な精神生活のためのヒントも盛りだくさんである。



後者は前職、外務省医務官としてスーダン・フランス・セネガル・中国に在勤しながら一九九四年から二〇〇六年にかけて「こころの臨床アラカルト」誌に連載していたものを単行本化したものである。

フランス駐在は、アフリカ駐在公館の館員の健康管理をフォローするのが主任務であった。パリからアルジェリア・モロッコ・ガボン・コンゴ民主共和国・カメルーンといった国々を定期的に往き来して大使館員の定期健診などにあたっていたが、それらの国々に出張の機会を生かし、現地精神科医療現場を見聞きする機会にも恵まれた。ジャングルに囲まれ国境管理の困難なガボン・カメルーンでは薬物の流入も日常的で薬物依存症が入院患者の上位を占めているなど印象に残ることが多々あった。また、部族社会のアフリカでは、部族語の存在から患者によって話す言葉が異なり(部族語)、日常的に通訳が必要といった、日本では考えにくい異文化にも接した。また、フランス国内では事件に巻き込まれる心的外傷をおった被害者に対するサポート体制が当時(一九九五年)からしっかり整っていた。当時の日本には無かった支援体制に感激しつ

つ、パリで犯罪被害に巻き込まれた日本人旅行者の保護業務で見よう見まねながら PTSD の情報提供など行っていたものだが、阪神大震災をきっかけとする一連の動きで日本もかなり追いつき、今となってはこの周辺の記述は日本でも見られるものばかり：なのは喜ばしいことと思う。

西アフリカのセネガル在勤では、伝統的治療師の知己を得て、セネガルの土俗信仰にもとづく治療儀式に招かれ一部始終を観察したり、伝統医療と近代医療が協調してプライマリケアを担ってゆく様子に触れたり、さらには「マラブーの呪い」が真剣に信じられる場面など、多文化間精神医学的に興味深きものを数多く経験した。

最後の中国在勤では、二〇〇三年三月の着任早々から SARS 流行に遭遇した。大使館の職務として現地日本人社会の社会不安に対峙し、また、北京の一般市民も含めた、流行の及ぼす心理的影響を観察する機会も得て、これを紹介している。これらの内容に加えて、アフリカ・中国の医療体制、自殺、医療格差、民族性、青年海外協力隊の素顔：何でもありのごった煮だが、楽しんでいただけるのではと思う。

(かつだよしあき・精神医学)